

## 『戦争の歌がきこえる』

2020年09月07日

佐藤由美子氏が『戦争の歌がきこえる』を上梓している。佐藤氏は、米国で音楽療法士として、アイリッシュ・ハーブやギターなどを弾きながら、終末期を迎えた人々の精神的、社会的、身体的なサポートをしていた。クライアントは第二次世界大戦の兵士たちで、過酷な戦争体験を持っていたが、その記憶を誰にも語らずに生きてきた。最期の時、音楽療法を受ける中で、逃れようとしてきた記憶がよみがえり、昨日の事のように思い出し、悲痛な表情で語った。佐藤氏は、それらの言葉を日本人に届けたいと、本書を著したと言う。

サイパンで戦った79歳の末期の肝臓がんの退役軍人が、佐藤氏が日本人であるを知った時、「僕は日本兵を殺した」と言って、抑え切れずに泣き続けた。ベトナム戦争は悪い戦争と言われ、帰還した兵士の多くがトラウマに苦しんでいた。良い戦争と言われた太平洋戦争で戦った兵士たちも、同じように心に深い傷を負っている。佐藤氏は「良い戦争というのは幻想である」と書いている。

93歳の末期大腸がんの患者はイタリア系の陽気な人だった。ホームで転倒し、寝た切りの状態になった。訪ねた佐藤氏が日本人と知ると、絶句した。彼はマンハッタン計画に関わり、自分たちが造った原爆が日本に投下され、多くの人が無残な死を遂げた写真を見た。原爆製造を知らずに加わっていたが、開発に加わった話を繰り返して話し、罪悪感を持ち続け、苦しんでいた。最期は、佐藤氏が歌う「サンタ・ルチア」のイタリア民謡を聞きながら、静かな眠りについたという。また、50代の筋ジストロフィーの末期患者は、「僕はベトナム戦争で枯葉剤を撒いたんだ！ 当時は枯葉剤がなんなのか知らなかった」と、自分を許せないと涙を流す元兵士もいた。知らなかったとは言え、人を理不尽に殺した加害者としての苦しみは消えることがない。

アウシュビッツを生き延びた人は、70代後半になっていたが、突然「ナチスが来る」と悲鳴をあげ、震え続けた。子どもには一度もホロコーストの経験を話したことはないが、晩年になって、心の奥深くにしまい込んでいた恐怖がよみがえったのである。7歳で、ヒトラーユーゲントに入りナチズムに心酔した元ドイツ兵士は、捕虜となりロシアの暗い森の中に連れて来られた。死期を前に、その暗い森の恐怖に捕らわれて苦しんだ。

第二次世界大戦で、亡くなった兵士、市民は五千万人を超えていると言われている。悲惨な戦争を体験した人々は、深い傷を負っている。彼らの多くが語ることを拒み、忘れようと必死であった。しかし、最期に、あるきっかけによって、フラッシュバックして、恐怖に襲われる。音楽を通して、安らぎと癒しをもたらしてきたが、心が解きほぐされ、戦争で傷ついた痛々しい告白があったと、様々な出会いから、報告している。そして、戦争体験者たちは苦しい体験を忘れた記憶としているが、「忘れたい記憶、向き合いたくない記憶を発掘し、保存し、語り継がなければならない。そうすることによって、自分たちの過去を知り、より良い未来につなげて行くことができるはずだ」と書いている。

指導者と一般市民は明確に区別される。戦争責任に関しては、「政府（指導者）」＝「加害者」、国民（一般市民）」＝「被害者」という図式が成り立って来た。しかし、カール・ヤスパースは、ナチスの蛮行に暗黙裡に加担した罪（道徳的罪）を認め、なぜ、そのような現実を許したかを良心に従って内省することが政治的自由のための必要条件であると述べている。「不作為」「無言の加担」は罪であるという視点で捉える時、世界共通の認識に辿り着けると、佐藤氏は、ホスピスのクライアントたちから聞いたのである。